

四月の法話 抄録

如来について

釋尼 花伝

当法話会のみならず、願生新聞を通して「如来」という言葉が多く出てきます。

そこでいつもご参会の井村様より「如来」って何ですか、というご質問がありましたので、今回は短い時間ではありますが、共に学ばせていただきたいと思います。

本日ご参会の方には、「仏教語大辞典」(中村元著)の如来についてのコピー資料をお配りします。

さて、如来というのはパーリ語とサンスクリット語の *rahata* の漢訳であります。(かくの「とく」+「行ける」という意味を漢訳者が「かくのごとく」(来れる)と解して「如来」と訳したことになります。当時のインドでは一般諸宗教で広く使われていた呼称であったそうですが、仏教の特に大乘仏教では、真如から来て、真理の体現者として衆生を教え導くという活動的な側面からする仏の異名と解されておりませ

なお、この辞典には記されていませんでしたが、釈尊がついに覺りをひらき、梵天からのすすめて衆生救済の法を説く為に立ち上がられて、最初の話し相手となったウパカと向かわれたときは、如来になる一歩手前で、如来に



はなれていないのです。なぜなら、ウパカには法を聞くまでの態度とそれ以上の縁がなかったからです。その後、ウパカと別れて、五比丘に再会をしたときに真理を聞く態度の整ったことを確認されて初めて釈尊は

「比丘らよ、如来に向かつて名をもってあるいは友よの言葉をもって語りかけてはいけない。(私は) 応供の者であり、如来したもの、等正覚したものである。」(聖求経)

といわれたのでした。ですから、私が学ばせていただいた原始経典では、釈尊から出された最初の如来は呼称ではなく、多くなる自覚よりの自称であるとのこと。このことから「如来」という内心の自覚というものは、聞者あつてこそ成り立つといえると思われ

ますので、よくよく心得ておきたいと思えます。さて、また「如来」は礼拝の対象としてあらゆる経典に出てまいります。紙面に限りがありますので今回はここまでとさせていただきます。

合掌

入参式

釋 法薫

第二回入参式を花まつりに取り入れることができることはうれしい限りです。



すっかり恒例となった 甘茶かけ 今年も雨だったので本間にて

深町様から電話がありました。

「念珠を作らせていただくこと、家族で楽しみにしておりました。」

私は、この念珠は、世界で一つしかないものであり、仏子の誕生としてこれからの世に光明を照らす役割を授かつていくものと確信しております。

念珠の輪の中に合掌をしてみれば、すべて因縁果としてあらわれてくること、がわかるものです。人生は、大慈悲(思いやり)の心が育つてこそ花が咲くのです。生まれてきてよかったと思ふ心もその一つ。それだけでなく、受け継がれる実がそれぞれの人を通して、さらに実らねばなりません。

今度、伊藤様

様が仕事を円満退職されて、これから

は仏道をさらに進んでいかれるとのこと。花と果物を用意いたしましたし、花まつり(入参式)の中でお祝いを行いました。

- 三帰依文
- 表白
- 献花(深町良美)
- 歎佛偈
- 昭和法要式



お陰様で み光につつまれて お釈迦様の前で 仏子の誕生

入参式の深町様

記念のお念珠を懸命につくら



れている深町良美さん(下写真)

心に如来を思うとき